別府で発見された「松の廊下刃傷事件」の記述本

『武家不断枕』について

安部和也

NHK大河ドラマ「元禄繚乱」の放映によって、忠臣蔵が再びブームを呼んでいる。

赤穂浪士四十七士が、武家御法度に背いて武具を携え徒党を組んで、吉良屋敷に討ち入った松の廊下の刃傷事件の原因について、吉良上野介義央が浅野内匠頭長矩よりの「附け届け」の少ないのに、つむじをまげ嫌がらせをしたのが原因だと古くより信じられていたが、現在では学者をはじめ歴史に興味を持った人たちからは、こんな筋の通らない話しはないとされている。

上野介義央は、家綱・綱吉の両将軍から高家衆筆頭という徳川幕府の儀式典礼の最高責任者として敬愛され、従四位上左近衛権少将に任じられ幕府から旗本として四千二百石の領地を賜わっている。その上足利氏を先祖にもっていたので、室町時代には吉良氏と諸大名が道で出会った場合、大名は吉良に下馬の礼をとったほどの名家であったので、エリート意識過剰は考えられるが、「附け届け」云々というほど上野介義央は強欲とは考えられない。

それを証するに、上野介義央は三河の領民から名君と慕われている。また実子は米沢一五万石藩主に、長女を薩摩七二万石藩主夫人に嫁がせているので、いざというときには当然米沢・薩摩の両藩よりの援助を望めるので、一般に言われているような強欲であったとは到底考えられない。

松の廊下刃傷事件以前のどの資料にも、上野介義央がケチで強欲であったことを証する資料は出て来ない。刃傷事件以後急に云われだしたもので、それは御公儀の失政を隠すために赤穂浪士を「武士道の鑑」に仕立て、内匠頭長矩を悲劇の主人公に、上野介義央を悪玉に故意に作り出されたものとの感がする。

赤穂浪士の吉良邸討ち入りから百八年経過した文化六年（一八〇九）に着手して、嘉永二年（一八四九）に完成した徳川幕府管選の歴史書『徳川実記』には、上野介義央を「附け届け」をあてにする強欲で、厚顔無恥の人物として次のように記されている。

「吉良は式典に通ずること当代随一なり。
されば賄賂をむさぼり甚だ高慢なり」

『徳川実記』が事実に反して、上野介義央を悪人に仕立てる記述は、松の廊下刃傷事件の原因を五代将軍綱吉時代の御公儀の失政が原因であるのを、上野介義央の内匠頭長矩に対しての仕打ちが原因で発生した事件であると原因のすり替えを行い、御公儀の失政をカムフラージュするためになされたものと考えられる。

御公儀の失政の最たるものは「生類憐れみ令」「大奥の浪費」それに加えて明暦の江戸大火の複興等による支出で幕府財政が逼迫したので、将軍綱吉はお側用人柳沢吉保と計って財政立て直しとして、親藩・外様を問わず落度による除封・削封を行って幕府領とする策をとった。綱吉時代に封を奪われた大名は、二十余家・石高百四十万石にも上ったという。

石高五万三千石なれど製塩事業で莫大な収入を得ていたと見られていた赤穂藩を、幕府領若しくは柳沢吉保領にして幕府財政を潤すことを計画した。藩主内匠頭長矩は短慮で持病（痞）持ちであるので、赤穂藩の国替えの方針を示せば内匠頭長矩は必ず騒動を起こすであろう。その咎として赤穂藩を断絶させ領地は召し上げて幕府領か柳沢領にしその上、浅野本家の安芸・備中四二万石を監督不行き届きの責によって削封を行い、それも幕府領にすることが出来ると考え、上野介義央に赤穂藩の「国替え」の話を内匠頭長矩に伝えさせたのではないだろうか。（NHKで放映中の「元禄撩乱」では、将軍綱吉と柳沢吉保が赤穂藩は勿論の事、吉良家ひいては上杉藩をも取り潰しを狙って仕掛けた出来事である。）

ところが、内匠頭長矩はこともあろうに勅使接待の殿中で、痞の発作（刃傷事件）を起こしてしまった。

この事件で内匠頭長矩を取調べれば、理不尽な「国替え」が公になるのを恐れた綱吉と吉保は、ろくな取調べもせず即刻切腹を言い渡した。

内匠頭長矩は刃傷の後、奥州一ノ関田村藩御預けとなった時、浅野家の家臣に伝言してくれと警護の士に依頼した文句が、遺言として伝えられている。

「かねて、知らせておこうと思ったが、そのひまもなくて、遂々、今日になってしまった。とにかく、今日のことはやむにやまれずとった行動である。さだめし、不審に思われようが……」

（一説では内匠頭長矩の遺言は偽遺言状であると）これだけで、刃傷に及んだ理由は伝えられていない。

内匠頭長矩が云った文句が公になると、赤穂藩の「国替え」が表面化するのを恐れた柳沢吉保は、田村藩に命じて削除させたのではないかとの推理が成り立つ。この推理を裏付けるものが、別府で発見されている。

昭和四〇年六月一日発行の朝日新聞文化欄に、早稲田大学教授戎能通孝氏が「異説忠臣蔵」として次のような記事を載せていた。

「別府のペンネーム堀和夫氏が、同市にある未公表の草稿本『武家不断枕』という書物の事を書いている。

「浅野の刃傷は、吉良の無礼に怒ったからでなく、浅野も吉良も幕府の政策の犠牲者だった。赤穂はいうまでもなく塩どころ、塩の利に目をつけた幕府では、吉良に命じて製塩の秘法をさぐらせ、もし浅野が教えなければ国替えをすると義央が長矩に洩らしたことで、長矩は心痛の余り刃傷の暴挙に至った」。

この記事は、大分市大道のハレルヤ書店が、なじみの客に配布する『芸編雑載』に昭和四十年五月堀氏が投稿した記事が、戎能氏の目にとまり朝日新聞を介して全国に広められたのであると、堀氏著書の「江戸時代の別府温泉史料」の中に記されている。

また、昭和五〇年中央公論社発行『真説元禄太平記』（著者南條範夫）の一三二頁から一三四頁にも次のように記されている。

「赤穂義士処刑直後の宝永初期の草稿本で、『武家不断枕』というものが別府で発見されたが、その内容は赤穂の塩に目をつけた幕府が、お国替転封によってこれを公収しようとしたことが、刃傷の原因ということになる。－中略－（堀博忠氏稿本による）。しかし幕府が赤穂領を公領とするため取り上げるつもりなら、容

易に出来るはずである。これはむしろ、柳沢吉保が自己の手に収めるため、吉良を通じて浅野に転封願いを出せと言ったと解した方が良い。いな、吉良が柳沢におもねってそれを発言したものと解した方が、さらに現実である。そう考えた私は、NHK大河ドラマ『元禄太平記』にこの説をとり入れてみた（原文転記）。

その『武家不断枕』原本の全文は未発表で、堀氏が生前部分的に発表した記事より判断するしかなく、堀氏が死亡した現在では全文を知ることは不可能と云える。現存する『武家不断枕』は上下二巻からなっており、昭和五一年所持者H氏の生前に、現物を目の前にして上巻は写本・下巻は原本との説明を受けた。（関連記事は『別府史談』創刊号に）

上巻は次のような文章で始まっている。

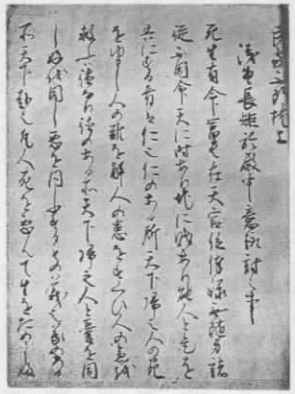
武家不断枕上

浅野長矩於殿中意趣討之事

死生有命富者在天官位俸碌無随身諸

随不同命天に時在り地に財あり能人と是を

共にする者は仁也仁のある所天下帰也人の死をゆるし人の難を解人の患をすくひ人の急を救ふハ徳なり徳のある所天下帰也人と憂を同じ好を同じ悪を同じふするもの義也義のある所天下赴也凡人死を悪んで生をたのしむ（後略）



『武家不断枕』の序文にあたるこの文章は、書名の如く元禄時代の武士は戦うことを忘れ、寝所で枕を使用するが如き頽廃ムードは、御公儀の失政によるものである。喧嘩両成敗の御法度は、将軍綱吉によって破られ御公儀の威信をなくし民衆の批判を浴びた。

お側用人柳沢吉保は、綱吉に取り入って百六十石取りから大名に出世し、老中おも指図する御公儀の責任者と

なった。この綱吉・吉保によって行われる御公儀は、人の道である仁・徳・義を無視した元禄時代を作り上げたと、著者である林仲助は云いたかったものと解釈される。

『武家不断枕』に記されている松の廊下の刃傷事件を、三百年後の今日考証してみる。（「　」内は堀氏の文章を転記したものである）赤穂藩国替えと赤穂塩について

「…お国表の塩田の事、げに珍重とお賞にあづかりたるも、かねがね御ん昵懇なる高家吉良どのより、内々のおもらしの事、あらせられ…」

赤穂の塩について、かねてよりお見知り頂いておる高家吉良上野介義央様より、大変なお誉めをいただきつついでにと申されるには、内々の話であるがご公儀では、赤穂藩の国替え転封を計画しているも、言い出せなくて柳沢美濃守吉保様は難渋している。そこで貴殿より国替え希望を申しでたら美濃守様はお喜びになって、屹度良きように取り計らってくださるだろうからと聞かされた。

「…入り浜・揚げ浜に、みそぞぎの頃あいは、陽光ともに容易なり。竈戸・薪柴とて、そのほどよさは有難きことなり。かてて加えて、かづかづの塩付けをなしたるにより、ききしにまさる佳品なり。〃塩・食肴の将〃のたとへ、ここもと赤穂塩を帥と云われしは誠なり。さりながら、公方さま、はばかる御様子とてなく、美濃守さまへ、お召し上げ、おかまいなしの由。まま伝え聞きしも、はてさて、たえなきさま多かるべし。斯ること、塩香風色であればかし…」

赤穂の塩田は、入浜式赤穂型開発塩田・揚浜式旧型塩田ともに、瀬戸内の遠浅な地形と雨も少なく日照時間の長い気象条件を利用した天日干し塩に、優れた窯ゆでの技術が加えられて、出来上った塩は純度の高い真白な結晶で食塩として日本一の絶品であること。

将軍綱吉様は、柳沢美濃守様に赤穂五万三千石を召し上げて如何にしようと、美濃守の勝手次第だと申された。と聞いたが、将軍綱吉は大名の活殺権の乱用を又はじめたか困ったものだ…。

刃傷事件前夜からの持病について

「…御儀式、相なかば済まされしも、あとあとの事、とどこおりなきよう念のため、御挨拶おとどけ参らせば、早々にさしおかされて、先々のおもらしの事、重ね重ね申されたる由。長矩ぎみには、殊のほか御心痛あらせられ、朝まだきに至りても、胸ふさがり未だにおさまらず…」

事件の前日、内匠頭長矩はあと一日の大役と、上野介義央に「附け届け」をもって挨拶に伺ったところ、赤穂藩国替えの話しを切り出され不愉快な気持ちで退散した。屋敷に帰った内匠頭長矩は、国替えの話しが頭から離れず、その夜は一睡も出来ずとうとう朝となった。内匠頭長矩は現代風に云えば鬱病の持病持ちで、それが心痛のあまり昂じて一発触発で逆上する状態になっていた。

赤穂浪士討ち入りについて

「…浪人衆の日増しの噂にも、御公儀の御せんさく、今しばし、ゆるやかなる御様子なれば、ここもとのふくみあいの事、いよいよ近からんと思いめぐらせおりしに、はからずも極月十四日、壮なるかな浪人衆四十有余名は、徒士いでだちで吉良邸に－中略－とす。ほどなきみしるしも、すぎる長矩きみのお始末も、みなみな御政道のしからしむる事かと、存じられしも…」

浪士の討ち入りは、すでに幕府では情報として把握されていた。御公儀の詮索がゆるやかになったのでいよいよ時節到来かと思っていたところ、十二月十四日赤穂浪士四十有余名は火事装束に身を固め武器を携え徒党を組んで吉良邸に討ち入った。

吉良上野介義央が赤穂浪士に殺害されたのも、浅野内匠頭長矩の切腹も、みな徳川五代将軍綱吉の御政道（責任者柳沢吉保）に影響された事件で、吉良家も浅野家も御公儀の犠牲者である。

御公儀が、赤穂浪士の吉良邸討ち入りを期待し援助していたともとられる数々の幕府の対応に、その疑惑が今日指摘されている。

一、刃傷事件後の元禄一四年三月、警護の厳しいご城内の呉服橋門内の吉良邸を返上させ、警護されてない城外隅田川東岸新開地本所松坂町に邸替えが命じた。（赤穂方に襲撃しやすく計らったと考えられている）

二、討ち入り前に、急に赤穂浪士の詮索がゆるめられた。

三、寅の上刻（午前四時）の討ち入りとは云え、四十余名が徒党を組んで吉良邸に向かったこと、誰一人として咎めなかった。

四、常時百拾名の警護に守られていた吉良邸で、当夜赤穂浪士と戦った吉良方の武士は三・四十名であつた。

五、吉良邸から泉岳寺に引き上げる赤穂浪士に対して、江戸詰めの各藩は、追っ手を差し向けず見ぬ振りをしていた。

等があげられている。

『武家不断枕』の著者林仲助について

播州の住人林仲助なる二八歳の士人が、赤穂浪士の吉良邸に討ち入り無事本懐を遂げた元禄一五年（一七〇二）より三年後の宝永二年（一七〇五）四月、山城の国宇治万福寺（黄檗宗本山）の添書を携えて別府村庄屋堀助之丞吉治を訪ね持病筋痛の湯治治療を乞うた。（万福寺と堀氏との関係は元禄十一年（一六九八）堀助之丞吉治が開基となり宇治万福寺より業海禅師を開山に招いて、堀氏一族の菩提寺蔭涼山万松寺を開いた関係）

堀氏は、丁重にもてなし筋痛は二春秋で完治したが、彼が文筆に秀でていたので周囲の人々から師表と仰がれ、別府万松寺開山業海とは特に交遊が深かったので、流川の堀助之丞邸・仲町の油屋与兵衛邸に留まっていた。

宝永六年（一七〇九）二月四日如何なる理由によるかは不明だが、腹十文字に掻っ切り心臓にとどめをあてたまま打ち伏して息絶えていた。

彼の周りには、堀助之丞吉治・業海禅師宛の書状と『武家不断枕』『別府湯治記』と山鹿素行・素水親子と大石良雄・大高源吾等の書・句短冊と大小刀が残されていたと伝えられている（堀助之丞家伝）。昭和四十年当時、別府に残っている林仲助の遺品は、素水の書（浜脇K家所蔵）と宝寿と刻銘された小刀（元町H家所蔵）のみであった。（二豊史話・義士外伝）

林仲助は如何なる人物かは確証は得られていない。『武家不断枕』下巻に播州住人林仲助と自署しているので、播州赤穂に何等かの関係を持った人物と判断される。

仲助自害の後宇治万福寺に問い合わせたところ、「彼は江戸・京都・大阪で既に十数編の著作を発表したが、それが筆禍事件となり薩摩の金山に流罪になっていたことがある。また彼は、赤穂の旧臣によく接触していた」との返書が届いたという。(堀助之丞家伝)。

後世の者は、彼を大石良雄の忠僕元助だと、あるいは片岡源五右衛門高房の忠僕とも、または近松勘六行重の家来甚三郎とも言っている。

『真説元禄太平記』一三四頁には、林仲助について最近になって桐原忠利氏は、浮世草子の作者「都の錦」の変名で、一時、寺坂吉右衛門を詐称していた人物ではないかと推察している。(原文転記)。

将軍綱吉－柳沢吉保－荻生狙徠ラインによる吉良上野介義央擁護論は、甲府綱豊(六代将軍家宣)が綱吉の後継者に決まると、赤穂事件は再評価に向いそれ迄の浅野全面否定の御政道は、しだいに緩和の兆候を示した。

綱吉時代、赤穂事件を題材とした芝居の上演は禁止されていたにも係らず、赤穂義士切腹後三年しか経っていない宝永三年五月には、大阪の人形浄瑠璃芝居小屋竹本座で近松門左衛門の「兼行法師物見車」を、六月には「兼行法師あとおひ碁盤太平記」が上演されている。この二篇を種本として寛延元年(一七四八)に、時代背景を太平記時代として「仮名手本忠臣蔵」(元禄の赤穂浪士の仇討事件を表した芝居)が竹本座で上演された。「仮名手本忠臣蔵」が上演されるまでの約五〇年間に、赤穂浪士の仇討を取り扱った歌舞伎・浄瑠璃は、約三〇種類の作品が上演されたという。

林仲助が著書『武家不断枕』で松の廊下の刃傷事件は、塩の利に目をつけた幕府が赤穂を幕府直轄地にするために仕組んだ陰謀で、浅野・吉良両家はその犠牲者である(事件後吉良家の領地没収。遺子義周は信州高島藩へ配流)と今から三百年前に、すでに言い切っていた仲助の炯眼の鋭さには感服させられる。

林仲助を「浮世草子」の作者とする、桐原忠利氏の説について調べてみた。「浮世草子」とは、元禄から明和・

安永に至る約八〇年間、京都・大阪を中心に出版された市民的小説の総称で、井原西鶴の『好色一代男』が代表的作品である。封建制度下の人間生活の種々様々の様子を、現実的に記したもので、それは「好色物」「町人物」「怪奇物」から「武家物」に至るまで形式・内容共に種々雑多である。

通説によると都の錦は、延宝三年(一六七五)生まれの本名宍戸光風・通称与一・浮世草子作家で、彼の没年は不明となっている。彼の作家活動は、元禄一五年に「東海道敵討・元禄曽我」(『元禄曽我物語』六巻)と「古今評判諸芸太平記外」(『元禄太平記』八巻)を発表し、また翌年にかけて七作を発表した。その後江戸に下ったが、放浪中無宿狩りで捕らえられて薩摩の金山の労役に送られた。宝永六年(一七〇九)特赦で許されて大阪に帰り、以来往悔子を称して執筆を再開すが、自己意識過剰が禍して破滅した異色の存在であったと伝えられ、上田秋成・平賀源内とともに近世三奇人の一人に数えられた。(『世界大百科事典』『大日本百科事典』)

林仲助と浮世草子作家・都の錦とが、同一人物の可能性を調べてみると、宝永六年に通説では、都の錦は薩摩の労役が許されて大阪に帰ったとなっている。一方堀助之丞家伝によれば、同年林仲助は別府で自刃している。

宝永二年(一七〇五)仲助は、堀家の記録では二八歳と記されているが、都の錦は自著の「元禄太平記」一巻の終わりに、

「……惜しいかな都の錦其功いくばくもあらずして、行年二七をかぎりに、西海の浪の泡と消ゆる事、洛中書林の涙ぞかし」と記している。

通説では「元禄太平記」は、元禄一四年(一七〇一)十一月に完成したとされているので、宝永二年には都の錦の歳は三一歳になる。

林仲助は、堀助之丞家伝によれば筆禍事件で薩摩の金山に流罪に、一方都の錦も江戸で捕られ薩摩の金山の労役に送られたとなっており、ともに薩摩の金山に流罪の刑が科せられている。と云うことは、御公儀より「松の廊下に紛らわしき喧嘩沙多と雖ども」これを狂言にしては相成らぬ」との禁令が出されていたのに、彼は禁令を破って仇討をテーマにした「元禄曽我物語」(またの名を

『東海道敵討』・岩井源之丞半次郎の兄弟の復仇を小説化したもの）を、元禄一五年春に大阪で発表して江戸に逃れていて、捕らえられ薩摩の金山に流罪になったと見てよかろう。

参考に「元禄曽我物語」のストーリを記してみる。

「岩井宇兵衛は、摂州藩に戸田流兵法家として二百五十石で召し抱えられており、従弟の所堀遊見の一子源右衛門（自称・一旨流の槍の使い手）を摂州藩に仕官を世話した時、源右衛門が放埒な行動を取ったのでそれを戒めた。ところが源右衛門は、それを恨んで宇兵衛を闇討ちにして立ち退いた。宇兵衛の長男兵助は、父の仇として源右衛門を探し求めたが廻り逢わず。源右衛門をおびき寄せんが為、父游見を殺害した。

所堀源右衛門は、大津屋弥六と変名し松井初右衛門・鳥居砂右衛門を助太刀に頼み父の仇として岩井兵助を討ち果たした。兵助には、源之丞・半次郎の二人の弟があり。元禄一四年、所堀源右衛門は水右衛門と名を改め勢州土山藩に知行二百石で仕官しており、岩井源之丞は無沢半兵衛と変名して家中の上村源助の若徒に、岩井半次郎は森助と変名して、同じ家中の高木甚九郎の草履取となって、所堀水右衛門を父宇兵衛門・兄兵助の仇敵として狙ったが用心厳しく二年余りの歳月の後、ヤット本懐を遂げたという」仇討物語で、大阪の作家西沢氏は「元禄曽我物語」の外題（書名）について次の様に記している。

「孔孟地を変えば同じからんといふごとく、賤が小手巻くり返し、むかしを今になすならば、曽我と岩井が武功いづれも勝劣あらじ。建久四年五月雨と元禄十四年五月闇と、富士山土山似たり因たり。故に作者元禄曽我と改められしはいかにも尤もじゃとおもふて…」

堀助之丞家伝によれば林仲助は宝永六年に自刃。通説の都の錦も、同年より消息不明になっている。二人の歴史は宝永六年を境にして、ともに終わっている。この事と、両人共に薩摩の金山えの流罪になっている事を考え合わせると、林仲助・宍戸光風・浮世草子作家都の錦は、同一人物とみて間違いなかろうと思われる。

別府には、林仲助の墓が二ケ所あると、古くより口伝されている。

自刃した林仲助を最初に葬った墓は、昔の海門寺共同墓地（現在の海門寺と海門寺公園を中心とした一帯）内の海門寺門前の東側に当時在った糸竹地蔵の近くに在ったものを、共同墓地整理のため寺内の「しぐれ松」根本の現在地に移転したものと。

「しぐれ松」根本の墓石

もう一つは、林仲助が生前千木風の石祠を造り寄宿先に祀り、朝夕かがさずお経を上げていたが、自刃後彼の遺髪を納め共同墓地内の海門寺より西方約一町程の小川沿いの、油屋与兵衛家歴代の墓地内に祀られたものとがあった（この石祠が油屋家墓地にあるのを見るかぎりでは、仲助の自刃場所は通説の堀助之丞宅とは異なり、仲町の油屋与兵衛宅といえる）。この石祠も海門寺共同墓地整理で油屋家の墓石と共に野口原墓地に移転させられてしまった（海門寺共同墓地移転は、明治四十四年駅前通り以北の都市造りのための耕地整理によって、大正末期から昭和初期にかけて市営野口墓地に移転させられた）。

海門寺墓地（油屋家墓地内）に祀られていた当初の石祠は、常に注連縄が張られており、腹痛にご利益があると信じられ多くの参拝者が祈願に訪れていた。石祠の傍らに夏みかんの老木があり、毎年数多くの実をつけた。参拝者は、「義士様が喜んで実をつけられた」といって誰もその実を取ろうとはしなかった。このみかんの老木は、小川の氾濫（明治三〇年頃）でなくなった等の話は、墓地整理が行われるまで土着の古老たちによって伝えられていたが、墓地整理で石祠も野口原に移転させられてからこの話は、語られ無くなってしまったと先祖から聞いており、また「二豊史話」にも記されている。

この石祠の前で、林仲助が朝晩必ずお経をよんでいた事と、彼の死後この石祠を「義士様」と呼んでいたことを合わせ考えると、この石祠は林仲助が生前赤穂浪士の霊を祀っていたものと考えて間違いなかろう。

「義士様」とよばててていた石祠

野口原墓地に移転させられた石祠は、三百年にも及ぶ風雪と近年の酸性雨によって原形（千木風）を止め無き程に損傷激しく、管理者は故事来歴を知ってか否かは知らないが、現在の石祠内には二体の「地蔵」が祀られている。

結び

御公儀の禁令を犯して「元禄曽我物語」を発表し捕らえられて、薩摩の金山に流罪となった都の錦こと林仲助は許されて大阪に帰ったが、自己至上主義の性格が禍いして地元上方では受け入れられず、宇治万福寺の薦めで薩摩の金山で痛めた筋痛を癒すため別府に湯治に来た。

湯治の傍ら筆を取って、松の廊下の刃傷事件は御公儀の失政によるものとした『武家不断枕』上下二巻を完成させたが、御公儀を批判したもののため発行する術がなく、作者林仲助は自刃をもって世の関心を引きたかったと考えられるが、別府が天領であったため世に出ることなく三百年間ヤミに葬られていた。

もし「武家不断枕」が当時世にでていたら幕府によって、押収され完全にヤミに葬られていたことを考えると、例え三百年の月日を費やしても、松の廊下の刃傷事件の真因は、御公儀の赤穂藩乗っ取りにあると世人の関心を呼び起こさせたことで、林仲助の自刃の目的が達せられたと思う。

参考資料

「学と文芸」・江戸時代の別府温泉資料（一～四）

『考証赤穂浪士』『正史赤穂義士』『赤穂事件の虚像と謎』

『忠臣蔵の世界』